土を考える会

若手農家の参加で活性化

全国6地区で500余名が参加

北海道土を考える会の北川会長に聞く

「土を考える会」は、農業に対する圃場づくりや基本技術、機械化をテーマとして先進的農家が情報交換を行い、手弁当で研鑽を重ねる革新的な農業経営者組織だ。1978年の「北海道土を考える会」の創立から45年、本州で各地区に設立された有機物循環農法研究会など様々な変遷を経て、現在全国6地区500余名の会員が活動を行っている。現在では第2・第3世代の時代となり、研究会も興味深い内容が多いことから若手農家の入会や参加が増えてきた。弊紙では全国6地区の土を考える会会長に、ご自身の農業経営や各地区での土を考える会の現状と今後について話を伺っていく（不定期）。

今回、第4弾として北海道土を考える会の北川和也会長(53)に話を伺った。

北川さんは、空知郡中富良野町で野菜作を中心に55㌶の作付けを行う天心農場を経営する。国営事業で整備された水田は1筆あたり4・5～1・5㌶と広大。畑地は最小で15㌃。田畑50筆にたまねぎを19㌶、秋小麦とビール大麦を各々12㌶、南瓜4㌶、人参2㌶などを作付し、坊ちゃんかぼちゃのつるし栽培など、こだわりを持った野菜栽培を行う。特にホワイトアスパラガスは管内で2軒だけが取り組む培土栽培。「土圧で穂先の開いていないホワイトアスパラガスは、遮光栽培との違いを理解してくれているレストランや八百屋、直売所では言い値でも納得して買ってくれているよ」と熱弁。

北海道土を考える会　北川会長

玉ねぎは商系・系統に出荷。商系は値段以上に労務提供など協力的な会社に出荷。労働者不足は同地でも顕著だ。

スタッフは従業員1人、季節雇用2人、技能実習生5人から構成。周年雇用は2月からの育苗、チコリの栽培で対処。

トラクタは、ニューホランドのT7・225の他、同一馬力帯でロングホイルベースのCASEPUMA185をはじめ、120馬力帯のCASEが4台(うち3台が6気筒。2台は防除と施肥専用)、100馬力が1台、80馬力以下の10台はクボタを使用する。「100馬力以上は6気筒がいい。中でも以前のCASEトラクタはボディ強度が強くてフレームもごついので重作業もいける。乗りづらいけど仕事をきちんとこなすよ」と話す。取材当日もインタートラクターサービスの整備士がPUMAを整備していた。

作業機はアッパーローターやにんじん用ロータリーの他、リールマシン4台。防除は反当100㌔を時速6㌔で散布可能な東洋農機の6千㍑けん引スプレーヤー（32㍍スライドブーム）をメインに、クロダ農機の2千㍑マウントスプレーヤーを使用。施肥はクーンのブロードキャスターAXIS3200で行う。

自動操舵はXCN1050やAgleader、CHCを使用し、特にXCNは脱着が簡単なのでトラクタ2台で運用。「直進だけなら角度情報を別のGPSに入力してスタート位置を合わせるだけで後作業でも直進できる。要は使いこなしだね」と強調する。

可変施肥についてはAXISが導入時点で未対応だったザルビオへの対応を表明しており今後、利用を模索したいとした。

また、トラクタへの上下分割ミラーやLEDライトの導入など利便性向上にも余念がないようだ。

【就農のきっかけ】

昨年は4回の入退院を繰り返すという闘病生活の中、天心農場の営農は40代を中心とした近隣の仲間たちが支えた。地域の兄貴分的人柄で親しまれているようで、取材中に何回も電話が鳴っていた。今はすっかり完治し、逆に糖尿気味だと苦笑するも今できていることを感謝したいと話す。

倉庫内で大切に保管される特注プラウ

そんな北川さん、富山県の福光町から移住した農家の4代目だ。就農のきっかけは、札幌の高校から予備校、そして東京都多摩市の農業者大学校へ進学。「毎日暇な時間を持て余して遊んでいた時に知り合った農学部の学生に『農家は農家出身でないとできないことをわかっているのか。新規就農するにはべらぼうにお金がかかるんだぞ』と諭され、調べてみると実際そうだった。それが転機になって、『農家でもやるかな』って軽い考えから、『選んでやる仕事だ』と心を改めた」と話す。

現在、就農から30年。当初の15～16㌶から3倍の規模となった。「土地が増えたのは初めの10年かな。就農したものの、父は農産物出荷会社の常勤役員を務め多忙だったので畑起こしと防除以外の作業は丸投げ。教えてももらえず、何もわからない中で難儀した。しかも悪条件の圃場を買ってきて面積ばかり増えていったので苦労したなぁ」と苦笑する。

試行錯誤する中で隣近所の農家を見て回り「何で獲れているのだろう…」と思いながら、いい仕事をする農家の動きを見て技を盗んで物にしていった。「ひたすら腕のいい人の仕事を見て理由を考えながら研究し、実践を繰り返した。道具の使い方や農薬を撒く時期、かん水の仕方も見て理由を考えて習得した」と感慨深げだ。

【農業機械の利用状況】

「ロータリーと防除機以外は、ほとんどがスガノ製品だ」と北川さん。サブソイラやプラウ、ディスクハロー（バーダスタッド）、鎮圧ローラー、カットロータリーなどがある。「作業機をコンビネーションで使うことも多いが、形が似ていても機能は非なるもの。何のための道具か熟考して組み合わせないと十分な性能が出ない」と話す。

取材時はニューホランドトラクタに強化フレーム仕様の3本爪サブソイラS603HGを装着していた。「耕深50㌢入れて、帯広畜産大学の谷教授の教え通り、時速3㌔で作業してもらっているよ」と話す。

またリバーシブルプラウは特注仕様として15㌢8連を導入している。1㍍のオフセットが可能で、ストロークが長いことからシリンダーを2本使用しているのが特徴的。緑肥（20㌢栽培）の鋤込みや、麦後、早生の玉ねぎ後にも秋起しで使っているそうだ。

そうした中でスガノ製品への印象を聞くと「昔からこの地域はスガノ製品に慣れ親しんでいて、特にプラウは速度問わず土がコロンと返せるからいいなという評価だった。それ以降も製品を見て使って感じるのは、かゆいところに手が届いていること。また現場に合わせたものを開発しようとするスタンスもある。特注プラウの時も、要望に応えようとする心意気のある社員の方々が対応してくれて、波多野さん（スガノ農機開発本部長）も頭を悩ませながら作ってくれた」と笑顔。今後の製品開発への期待として、国際農機展で参考出品していた7本爪の油圧式可変サブソイラの4本爪仕様を要望したいと北川さん。「全面を割らずに固い所を残したいのでコールターと鎮圧ローラー付で是非！」と期待を口にした。

【スガノ農機との出会い】

就農当時から当たり前にスガノ農機製品を使っていた北川さん。関わりが深くなった最初の転機は、水田用と思われていたレーザーレベラーを畑作用として導入してから。暗渠も効かず、台風被害を免れることのできないすり鉢状の圃場改善に向けてのことだった。「それまで沼のような所で玉ねぎを作っていた。そこの高低差50㌢をレベラーで均して、傾斜均平で表面水を明渠に水を抜けるようにした結果、獲れるようになった」と懐かしそうに振り返る。その実践から、2011年末に岐阜県海津市のサンフレッシュ海津で開催されたスガノ農機主催のイベントに招かれ、現在まで深くお付き合いさせていただいている北海道土を考える会の尾形さんや田村さんとも出会うことができた。

次の転機は国営事業だった圃場整備が終了した頃。「暗渠が効かずサブソイラを入れても中々改善しないと尾形さんに相談すると緑肥栽培を勧められ、緑肥の作り方や考え方を模索しながら、そのための道具を集めていったら、この5年で納屋をスガノ農機製品が占めていた」と笑った。

北海道土を考える会

楽しく交流、気づきを得る

やりたい・わからないを実践し学ぶ場

「北海道土を考える会」の夏期研修会は、毎回100人前後が参加している。支部は道央・十勝・道東、そして上富良野周辺は中央支部となる。年齢層は十勝の世代交代や、道央が協賛している雪国直播サミットを通じた新たな若手の参入が続き盛り上がりを見せている。そんな中、7月10日の総会で、北川さんは田村会長からバトンを受け、北海道土を考える会会長となった。会員歴は10数年と浅いと謙遜しながらも「毎年7月に開催となる全道での夏期研修会だけでなく、支部ごとの活動を行き来するだけでもとても勉強になる」と北川会長。

先般開催された夏期研修会について聞くと「今回の準備のために、何日も土の館に通って作業したけど、自分が楽しみだからまったく苦にならなかった。皆さん手弁当で集まってきてくれるのだから、できるだけ得られることが多いようにしたいよね」と話す。

現在行っている自身の作業体系も、土を考える会の先輩から話を聞き、気づきを得て、学びながら進化させてきた。「先輩方の引き出しの多さには毎回驚く。聞いている時はわからないこともあると思うけど聞いて損はない」と話す。

そこで今後やりたいことを聞くと「研修会を通して先輩たちの土への想いを後生に伝えるために物語にしたい。前会長の田村さんはもちろん、仁木さん、長門さん、玉手さん、武智さん、小尾さん、吉田さん、細川さんなどなど…。試行錯誤を続けてきた先輩たちだからこその真理についてお話しいただくと共に、会としての感謝の意を具体的に表せたらと思っている」。

一方で若手の会員とはSNSを通して交流し、その輪は道内だけでなく全国へと拡がっている。そうした中で各地区の土を考える会の会長が参集して新たな全国化について検討された件について聞くと「以前の様に四角四面に組織だった全国化は、色々な意味で大変だったと思う。それと比べると会長間で現在検討しているのはとてもシンプル。すべての地区での活動を積極的に共有して、面白そうなことをしていたら何処でも誰でも参加できるようにすること。土を考える会の会員は、楽しそうだったり、会いたい人がいたらすぐに自腹で動く人ばかり。それができる環境づくりができたらいいね。今回、夏期研修会に全国各地からそれぞれの会長に来てもらったから1度くらいは日本中を巡りたいよね」と笑顔で話した。